

令和8年度 幼児教育研修（年齢別担任研修5歳児・第1回）

「子どもの育ちと保育者の関わりについて」

～子どもとつくるつながる保育とは～

日時：令和8年6月2日（火）14：45～16：45

会場：足立区役所 庁舎ホール

講師：東洋英和女学院大学 人間社会学部 子ども教育学科

教授 塩崎 美穂 氏



### 4～5歳児期の発達の特徴

- 世界を「推理」で理解する（理由を知りたくなる）：力を合わせて原因究明  
→原因や理由を探ろうとする時期。「推理」できるようになると、「推理」することそのものが楽しくなる。
- 自他の心の「二重性」（うそをつくこと）：他者からの共感を受け入れる  
→複雑な気持ちを持ったり理解できるようになる。「わかる気持ち」と「受け入れられない気持ち」の2つの気持ちが同居するようになってくる。
- ルールのある遊び：自己コントロールを土台として  
→遊びの中にルールという要素が入ってくる。ルールを守れるのは自己コントロールが関係しており、「ルールを守った方が楽しい」と実感として入ってくる。「守る」だけでなく、友達と「変える」「つくる」こともできるようになる。
- ストーリーのある遊び：「～しながら～する」という2つの行為を同時に意識しながらできる  
→遊びがストーリーをもって展開していく。そのストーリーを友達と共有しながら遊ぶことができる。2つの行為を同時に意識できる力が関係している（マルチタスクの基盤）。また、聞きながら別のことをちょっと考える「ながら」行為（ワーキングメモリー）もできるようになる。

#### 「つくる」こと

##### ★つくることへの没頭

→ うれしく心地よい空間・時間がある

★なにかを見て、聴いて、触って、味わって、歩いていくこと通して、絵や歌やリズムや言葉などにつなげる。その時々で得る「衝動」から、思わず夢中になってつくる

★たとえ一人で作業しても、ヒトは一人でつくっているわけではない

★「主体」や「やる気」は外から判断することではない。ヒトは、衝動的即応的につくり、つくることでまわりとつながる

人と人がつながっているのかを感じとる

#### 「つくられたもの」から感じること

- ・（子どもに感じとる）不明確なものが、現実には子どもを育てている
- ・保育者の願ったものが、保育者がとった行動の中で通じたかどうか
- ・それは、子どもが育つ姿の中で保育者自身が気付かなければならない

- ・最近「つくったもの」は？
- ・「つくる」と言われて思い出すイメージは？
- ・「つくる」ことは、どこに/誰にどんな風に「つながって」いる？



グループで話した後、みんなで共有しました

今流行している『シール帳』遊び。子どもたちも廃材などの素材を使ってシールをつくり、友達と交換などして楽しんでいる。その中で子どもから「先生も交換しよう」と誘われたことがきっかけで、シールをつくるようになった。子どもたちは保育者がつくる様子を見て、「こうやってつくるんだ」と作り方をよく見ていた。



子どもたちと一緒に、なす、ピーマン、きゅうりを育てていることがきっかけで、家庭菜園を始めた。採れたてを食べている。



園内に鳥の雛がいた。子どもたちも興味をもち、鳥のコーナーをつかった。雛の様子を写真に撮ると、絵を描いて切り取るなどして鳥をつくる様子も見られた。鳥が巣立つと「違うところに行った」「ワシントン州に行った」と話していた。



## 人間の偉大さは、目標ではなく橋となることにある

分離ではなく  
結合



分断ではなく  
つながり

結び付け・引き寄せ・つなぎ  
共にあることを保つ

「橋をかける」ということは・・・

### 「橋をかける」ということの意味(メタファー)

さらにその先へ進み、未来の世界に心を開き、新しい道を切り開き、新たな出会いを許容し、可能性と新たな知識や理解の形へ心を開くことでもある。こうした、橋がもつ特性と、橋をかけるために必要な努力、つまり、曲げたり、しなやかに(湾曲)させたり、柔軟に変形(アーチ状に)させたりするために必要な柔軟性を結びつけて考える。



「橋」は、どこから支えて成り立っているのか。両方から支えないと成り立たない。互いに支え合い、支持することで知恵が生まれ、人とつながり、支え合っていく。

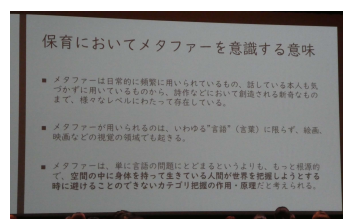


「橋」から自分が思い出すもの(橋のメタファー)を  
みんなで共有しました。

それぞれの空間で遊んでいたが  
お互いの遊びに気付いた。  
「行ってもいい?」「いいよ」  
遊びと子どもがつながった。



次のメタファーにどう移行  
できるのかが大事になっ  
てきます。



## 5～6歳児期の発達の特徴

- 相手の立場になって考える  
→ 教えたり、励ましたり、慰めたり、協力したりすることができる。(自分の考えや見方から離れる。)
- 多面的に「世界」を理解する: 「できるーできない」の見方を超える  
→ 「比べて」認識する方法に加えて、「できることもあるが、できないこともある」「○○ちゃんは好きだけど、こういうところはちょっと・・・」など、多面的に人や物事を理解できるようになる。
- 合意形成能力: あーだこーだいいながら一致点を探っていく  
→ お互いに意見を出すだけでなく、みんなで一致した結論を出せるようになってくる。何でも言っているという安心感や、一致するための対策を出せる想像力、相手の意見を聞いて、自分の意見を変えるような柔軟性、みんなで何かに取り組む楽しさが根付いているからこそ、みんなで話し合って決めたいという合意形成を目指す。
- 生活の仕組みを追求する: 学童期以降の学習の土台  
→ 生活や遊びの中で、体験や経験から推理をして答えを出していく、問いを出していく、それを解決しようとする。その過程で、これまでの自分たちの見方を変えたり、広げたり、深めたりして驚きや納得を得ていく。これが、**学びの原点**となる。学習の土台となり、「なるほど!」という**知的興奮**を幼児期に体感していることが**学習の原動力**になっていく。

研修生の  
報告書より

- ★ 子どもにとって「つくる」ということはとても大切なことだと学んだ。子どもは「これを作るにはどうすればいいの?」を毎日考えていて、作ることに没頭することで心地良さを感じ、誰かと一緒に作ることで人と人とのつながりを感じ、5歳になると人と人とのつながりから相手の立場に立って考えるという姿が育っていくということだった。そして「橋をかける」ということ。橋は二つの点を結びつけるという役割があり、保育者が橋のような存在になってつながりや子どもたちの未来への可能性を広げてあげることが大切と学びんだ。つながりを大事にしていこうと思う。
- ★ 子どもたち自身が何かを感じて得たものを実践できる環境が日々できているのか、改めて学び直すことができた。また、日々の子どもとの関わりの中で、子どもたちの本心を聞き逃さないことも大切であることを感じた。「橋をかける」という言葉で様々なイメージが湧くように、日々の保育でも子どもたちが何をイメージしているのか読み取り、5歳児ならではの発見や成長に繋げることができるような保育士でいたいと感じた。